

ホームズとモリアーティ

蔗糖

モリアーティと呼ばれる少女は完全犯罪を犯す。

自分の存在を全く悟られず、数多の人間を利用して間接的に殺人を招く。

少女は自分の考えた至高の芸術品を完成させるため、数年ぶりに母国へ帰ってきた。

「早く会いたいな、私のホームズ君」

初投稿です。タグがよく分からないのでつけた方がいいものとかあったら教えて下さると嬉しいです。

目次

プロローグ	1
モリアーティと呼ばれる少女	1
第一章 黄昏時の小説家	5
第一話	5
第二話	14
第三話	24
第四話	33
幕間	43
第二章 お金で買えるもの	49
第一話	49
第二話	59

第二話

.....

プロローグ

モリアーティと呼ばれる少女

まだネタ段階ですがお試しという感じで書きなぐってみました。続くかは未定。

少女は喧騒の中を歩く。

周りには人、人、人。

話す言葉や肌の色、歩く方向までバラバラなまるで統率力のない集団の中、大きなキャリーバッグをゴロゴロと引いて少女はゆっくりと歩く。

ここは米国ジョージア州に位置する世界最大級のハブ空港、ハーツフィールド・ジャクソン・アトランタ国際空港。

年間乗客数ナンバーワンの「世界中で一番忙しい空港」の中、ゆっくりとしたスピードで歩く少女はスマートフォンを取り出してどこかへ電話をかけている。後ろを歩いていた出張中のサラリーマンらしき男は、するりと少女を追い抜いて搭乗ゲートに向かった。少女の黒くてながい髪が揺れる。

「ハァイ、お久しぶりです。この前はありがとうございました」

少女の口から飛び出したのは流暢なクイーンイングリッシュ。

アジア人特有のエキゾチックな顔立ちをしているが、薄めの唇やぱっちりした瞳にどこか多国籍を感じさせる。なんともミステリアスで魅力的な少女は、しかし周囲の目を引くこともなく自然と風景に溶け込んでいた。

『あれくらいお安い御用ですよ。で、どうです？ 計画通り上手くいったかな』

電話の相手は男性のようだ。耳に心地いいテノールで響くイタリア訛りの英語を聴きながら、少女は鈴の鳴るような声でうふふと笑った。

「ええ、そっくりそのまま計画通り。石橋を叩いて渡ったかいました」

『俺は石橋を叩く杖ってところか。相変わらず、貴女が何を考えているのかさっぱり分からなかったよ』

ご謙遜を、と言って少女は微笑む。ざわざわと絶えずうごめく喧騒の中に、唯一規律をまとった音声が響いた。空港の搭乗アナウンスである。集団の一角に一定の規則性が生まれた。

『もう出国するのかい？ 今度はどこへ？』

「秘密です。久し振りに私のホームズに会いに行こうと思って」

『……ロンドン、じゃないよなあ』

少女には電話の相手がお手上げ、というように肩をすくめるのがはつきりと目に浮かんだ。

『まあ、行先がどこであれ、素敵な旅になることを願うよ。また貴女に会える日を楽しみにしていますから、モリアーティ先生』

「ええ、また近いうちにお会いしましょうね」

モリアーティと呼ばれた少女は電話を切ると、くるりとUターンして先程より幾分か速いスピードで歩く。

少女が乗る便まではまだ時間に余裕があった。何か手土産があった方がいいかしらと考え、空港内部にある人気のチョコレート店へ足を進めた。

少女の行先は日本。幼少期を過ごした生家に数年ぶりに帰る予定である。

自分がいない間にホームズに異変が起きていることなど露知らず、少女――

阿部^{あべ}美織^{みおり}は呑気にチョコレートを選んでいる。

再び搭乗アナウンスが流れて、集団の一角に規則性が生まれた。

「早く会いたいな、私のホームズ君」

第一章 黄昏時の小説家

第一話

——あの大人気推理小説『黄昏の研究室』が映画化されることが発表されました！
原作の茶谷先生は——

つけっぱなしのテレビから女性アナウンサーの声が響く。うらかな日曜日。事務所のテーブルで算数のドリルをやりながら、俺はお昼のニュース番組の音声を漫然と聞き流していた。

「へえ、あの小説映画化するんだって！　コナン君知ってる？　って、小学生にはまだ難しいか」

蘭の問いかけに顔を上げると、テレビでは主演俳優のコメントが流れているところだった。

話題にあがっているのは数年前に発売された人気の推理小説で、俺も新一だった頃に読んでいたが、小学一年生が読むには難しい内容であることは事実なのでアハと笑って誤魔化しておく。

「蘭姉ちゃんは読んだことあるの？」

「発売された頃に読んだわよ。すごく話題になってたもの」

とても面白かったと楽しそうに話す蘭。たしかにあの小説は、巧妙なトリックと斬新な結末がすごく面白かった記憶がある。実はこの作家のファンだったりするくらいだ。

番組は既に次のニュースに移っている。

その時、ピンポンと事務所のインターホンが来客を告げた。依頼だろうか。肝心のおっちゃんは今程からソファでいびきをかいているけど。

「美織ちゃん!? うわ〜久し振り! いつ帰ってきてたの?」

やけにテンションの高い蘭の声に不思議に思っただアの方を見ると、そこには数年ぶりに会うひとつ歳下の幼馴染。

彼女——阿部美織は、長い黒髪をふたつの三つ編みに纏めて、数年前と少しも変

わらない様子でそこに立っていた。

「ちよっとお父さん起きて！ お客さんよ！」

「んあ？ なんだあ依頼か？」

「違うけど！ ほら、美織ちゃんが帰ってきたのよ。覚えてるでしょう？」

美織は俺の隣の家に住んでいて、歳は違ったが昔はよく蘭たちと一緒に遊んでいた。彼女が帝丹小学校に入学して一年くらいした頃に、両親と共にイギリスに引越してしまふまでは。

彼女は恐ろしく頭が良く、いわゆる天才少女と呼ばれるものだった。その才能を活かすために外国の教育を受けさせるという話でイギリスに行ってしまったのだ。実際、彼女は海外でその才能を遺憾なく発揮し、イギリスの新聞でよく姿を見かけた。たしか、たった七歳でイギリスのオックスフォード大学に入学した日本の天才少女だと。

大学院を卒業してからは表舞台から姿を消していたが、たまに連絡を取り合っていたし、イギリスに行った時は彼女に会ったりもしていた。

「お久しぶりです小五郎おじさま」

「ああ、あの美織ちゃんか！ 随分美人になったなあ」

ガハハ、と笑うおっちゃんに彼女はニッコリと微笑みを返して、勧められたソファに腰掛ける。

「お姉さんは蘭姉ちゃんのお友達？」

俺がソファの横から話しかけると、彼女は俺の存在に今気がついたというようにこちらを見て、そして少し驚いたような顔をする。

蘭が美織のことを紹介すると、彼女はこの子は？ と言って俺の頬をつんつんとつつく。俺は数秒間されるがままになっていたが、はっと正氣に戻って彼女の手をやりわりと退けた。

「ああ、その子はコナン君よ。ご両親が海外に行つて、その間うちで預かつてるの。たしか新一の親戚なんだよね」

工藤君の……と小さく呟いて俺の顔をまじまじと見つめる。たしかにそっくりだと呟く彼女に、俺は冷や汗をかきながら子供らしい笑顔を意識した。

「江戸川コナンだよ。よろしくね美織姉ちゃん！」

彼女はしばらく疑うような目で俺を見ていたが、ニッコリ笑つてよろしくねと返

してくれた。これ、バレてんじゃねえのか？

「それより美織ちゃん、いつ日本に戻ってきてたの？」

蘭がお茶をテーブルに置き、向かいのソファに座る。彼女はお茶を一口飲んでから蘭の質問に答えた。

「昨日のお昼頃よ。向こうでやることもだいたい終わったし、しばらくは日本にいるつもり。色々立て込んで連絡できなくてごめんね」

そういえばお土産が……と言って持っていた紙袋から高そうなチョコレートの箱を取り出す。

空港で買ったの。結構有名なお店みたいよ。と笑う彼女に、蘭はそんないいのと言いながら嬉しそうに箱を冷蔵庫にしまいに行った。

「そういえば蘭ちゃん、工藤君が今どこにいるか知らない？」

昨日の家に行ったのに留守だったのよ。せっかく工藤君にもお土産買ってきたのに……と残念そうに呟く彼女に、俺はグクリと身を固める。

恐ろしく頭の良い彼女に自分の正体がバレてしまわないかただただ不安だ。絶対にボロを出さないように気を付けないとな……

「新一なら、今は何かの事件を追って海外にいるみたいよ」

いつ帰ってくるのか私にも分からないのと寂しそうな顔をする蘭に、美織は残念そうに小さな声で何か呟く。聞き取れなかったその言葉を聞き返すと、彼女はお土産渡せないなと思って、と誤魔化すように笑った。

「そうだ蘭ちゃん。このチョコレート、明日学校で園子ちゃんに渡してくれないかな」

彼女はもうひとつの箱を紙袋ごと蘭に差し出す。袋には綺麗なデザインで店のロゴが印刷されている。

「園子に？ いいけど……」

「もともと工藤君に買ってきたものだけど、渡せないし。私が食べちゃうよりは園子ちゃんにあげた方がいいでしょ」

蘭はそうね、と頷いて紙袋ごと冷蔵庫にしまった。

それから、数年ぶりに再会した感動にまかせてお喋りに興じる女子二人。女は三人寄れば姦しいと言うが、二人でも十分すぎる。貰ったばかりの高級チョコレートと美織が振る舞う英国式ミルクティーを燃料に、二人のお喋りは夕方まで盛り上

がった。

おっちゃんは今途中で居づらくなったのか、いつの間にか下の階の喫茶店に逃げ込んでいた。俺は二人の声をBGMにして宿題のドリルを消化するのに専念した。

毛利探偵事務所を出ると、既に少し日が傾いてきていた。久しぶりに会った幼馴染に気分が上がり、少し長話しすぎてしまったことを反省する。

帰国したばかりで調理道具さえ揃ってないので、コンビニで適当に夕飯用のお弁当を買う。日本のコンビニは品揃えがよくて、つつい菓子パンやらなんやら買ってしまった。まあ、明日の朝ご飯にでもすればいいのだ。

せっかく会いに来たというのに、あいにくホームズ君は長期出張中らしい。せっかく私の芸術が完成間近だというのに。貴方に見せるためにわざわざ日本を舞

台に選んだというのに。

「帰ってこないなら、先に始めちゃうわよ」

そうだ。舞台を離れた探偵役なんて無視して開演してしまえばいい。

舞台セットも、衣装も、観客も、彼以外の役者も全て揃っている。後からのこの遅れてやってきた探偵役が見逃したことを悔やむような、そんな最高の芸術を皆で演じよう。

気になるとすれば、居候のコナンとかいうあの少年。

工藤君の親戚らしいが、それにしても小さい頃の彼に似すぎている。いつの間にか生まれていた年の離れた弟だという方が納得できるくらいだ。

彼は私の舞台設定に組み込まれていない。予定外のアドリブはない方が美しいというのが私の見解だけど、まあちょっと子ネコちゃんが紛れ込むくらい問題ないだろう。それくらいで私の芸術は狂わない。

それとも、あの少年がホームズの代わりに探偵役を務めてくれるとでもいうのだろうか。名だたる推理小説作家の名前を持つ彼は、それほどの逸材になりうるのだろうか。

どちらにしろ彼がイレギュラーであることは間違いない。事前の下調べでは、工藤新一に江戸川コナンという名の親戚は存在しないはずだった。彼には何か秘密があるのだ。

ビュウと強く風が吹いて、ながい三つ編みが揺れた。あたりはうつすらとオレンジ色の光で照らされて、まるで空が燃えているようだ。と詩的な感想を抱く。

黄昏時だ。舞台の開演には相応しい。監督の合図で幕は上がる。

さあ、始めようか。

第二話

「蘭！ 次の日曜日、予定あいてるわよね!？」

「う、うん、あいてるけど……」

「パーティーよパーティー！ イケメンよ！ 笛川理人に会えるのよ!!」

今週の日曜日、米花ホテルにて『黄昏の研究室』の映画化記念パーティーが開かれる。

主演俳優である笛川理人^{ふえかわりひと}をはじめとした映画スタッフと、その関係者たちが集まる豪華なパーティー。そのパーティーに、鈴木財閥の伝で参加できることになったというのが園子の話だった。

「ということで日曜日に行くことになったんだけど、コナン君も来る？」

「それって美織姉ちゃんも来たりするの？」

正直そこまで興味のある話ではないが、蘭の誘いを断る理由もない。しかし、美織が来るというなら話は別だ。

彼女の頭脳をもってすれば俺が工藤新一だと気づかれるのも時間の問題である。昨日会った時も怪しまれている様子だったし、できることなら接触は避けた方がいい。

「それが、美織ちゃんも誘ったんだけど、その日は用事があるから来られないんだって。原作者の茶谷先生も出席するって話なのに、残念よね」

「え!？」

『黄昏の研究室』の茶谷千といえ^{ちやたにせん}ば、覆面作家で有名な小説家だ。

出身は日本のようだが（単純に著書が日本語で書かれていることから推測である）、現在どこに住んでいるのかも、年齢も、性別さえ分からない謎の推理作家。そんな人物が参加するとなれば行かないという選択肢はない。俺は素早く手を挙げて返事をする。

「はい！ ボクも行く！」

「蘭、俺も行くぞ！」

「え？ お父さんも？」

お父さんってこの小説読んでたっけ……と不思議そうにする蘭に、先程までテレビの中の女優にデレデレしていたおっちゃんは目を爛々と輝かせて叫んだ。

「ヒロイン役で柴山瑠璃子ちゃんが出演するんだ！ 行かない手はねえだろ!!」
バツと手で示した先にはテレビの中でこちらに手を振る美人女優に、存在を主張する新作映画出演のテロップ。

待ってろ瑠璃子ちゃん♡と叫んで再びテレビに釘付けになるおっちゃんに、俺は蘭と顔を見合わせて、アハハと乾いた笑いをこぼした。

「らーん！ こっちこっち！」

会場である米花ホテルに着くと、ロビーで待ち合わせしていた園子が立ち上がって大きく手を振った。

「ごめん園子、準備に時間かっちゃって……」

行きましょ！　　と言って歩き出す園子について荷物をロッカーに預け、会場に入る。そこには既に大勢のパーティー参加者が集まっており、色とりどりのドレスや着物、タキシードに身を包んで談笑していた。

中央には長いテーブルがひとつ置かれており、時間になればそこには美味しそうな料理が並ぶのだろう。

と、その時。会場の照明が薄暗くなり、奥にあるステージにパッとスポットライトが当たった。

「始まるみたいね」

周囲のざわめきが次第に収まり、皆がステージに注目する。すると、一人の若い男性がマイクの前に立った。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。これより、『黄昏の研究室』映画化記念パーティーを開催させていただきます。後ほど主要スタッフの皆様にご挨拶いただきますので、それまで米花ホテル自慢のビュッフェをお楽しみください」

大きな拍手が響き、男性がステージから降りる。照明が元の明るさを取り戻す

と、中央の長テーブルにたくさん料理が並べられた。皆で皿を持って料理を取りに行く。

「うわあ、どれも美味しそう！　コナン君はどれがいい？」

取ってあげると言う蘭に食べたい料理を盛り付けてもらい、お礼を言って皿を受け取る。

「見てよ蘭！　あれ、この間日本アカデミー賞で監督賞もらった井上監督よ！　あっちにいるのは女優の柴山瑠璃子だし、そっちは……」

「失礼、お嬢さん方。その料理を取ってもいいかな」

興奮して喋りっぱなしの園子に声をかけたのは、すらりと背が高く、長めの黒髪を綺麗にセットした色白のイケメンだった。

「ふ、笛川理人……」

「ほら園子、いつまでもここにいたら邪魔よ。あっちで食べよう」

間近で見たイケメンにくらりとなっている園子を、半ば引きずるようにしてテーブルから離れる。

「あれ、そういえばお父さんは？」

「小五郎おじさんならあそこだよ」

ほら、と指さした先には、女性スタッフの集団に声をかけてキメ顔で名刺を渡すおっちゃんの姿がある。蘭は父親をしらけた目で見ると、ほっとこ、と呟いた。

「ねえコナン君、あれ……」

蘭の視線の先には綺麗な着物を着た高校生くらいの女の子がいた。スタッフの娘かなにかだろうか。それとも、俺たちと同じように何かの伝で参加した一般人だろうか。

「あれ、美織ちゃんじゃない？」

「え!？」

もう一度彼女をまじまじと見ると、たしかについ先日再会したばかりの幼馴染の面影を感じる。そうこうしているうちに向こうも俺たちに気づいたようで、驚いたような顔をしてこちらへ歩いて来た。

「蘭ちゃん、園子ちゃん、それにコナン君も。どうしてここに？」

「美織ちゃんこそ！ 用事ってこれの事だったの？」

「ええ、ちょっと仕事で……」

薄黄色の華やかな着物を着た彼女は少し化粧をしていて、それが雰囲気をより大人っぽく見せていた。

「え、もしかして美織？ 久しぶりじゃない！」

蘭からあんたが帰ってきたって聞いてびっくりしたのよ？ と言ってばしばし美織の肩を叩く園子に、彼女はクスクスと笑って久しぶりねと返す。

「園子ちゃんも元気そうでよかった。それで、今日は園子ちゃんの伝で？」

「そうよ。正確には叔父様の伝で、笛川理人を見に来たのよ！」

相変わらずイケメンに目がないのね、とニッコリ笑う美織。俺は先程の彼女の言葉が気になって、着物の袖をクイツと軽く引っ張った。

「ねえ美織姉ちゃん、お仕事ってな……」

「阿部さん！」

俺が話しかけようとしたちょうどその時、先程ステージで開催の挨拶をした男性が美織のことを呼んだ。彼女は俺が話しかけようとしたことに気づいて視線を下に向けていたが、名前を呼ばれてハッと顔を上げる。

「あ、ごめん、もう行かないと……コナン君、何だった？」

「あ、ううん、やっぱいいや」

そう？ と首を傾げる彼女に再び男性が呼びかける。彼女は慌てた様子で蘭たちにもたねと挨拶をすると、急いで男性の方に行ってしまった。

美織が去ってから暫くして、再び会場が薄暗くなりステージにスポットライトが当たった。

先程の男性はおそらく司会役なのだろう。男性は中央のマイクでスタッフの挨拶が始まる旨を伝えると、ステージ脇に移動して台本を読み上げた。

「それではまず、主演の笛川理人さんからお願います」

大きな拍手と共にステージの脇から先程のイケメンがマイクの前に立つ。

「ただいまご紹介に預かりました、主演を務めさせて頂く笛川理人です。僕は今回の映画が初主演ということ——」

順調にスピーチが続き、主演俳優の後はヒロイン役を務める女優、総合演出がそれぞれステージ上で軽く映画への意気込みを語った。

今回の映画はなかなか気合が入っているらしく、初主演の若手俳優の足場を固めるように人気女優やベテラン演出家が起用されている。人気作家の初映画化作品だし、発売当時とても話題になった人気作だけあって世間からの注目度も高い。気合が入るのも当たり前だろう。

「続いては、原作の茶谷千先生です」

司会の男性がよろしくお願いしますと言って顔を上げた、ちょうどその時——
バチンッ

「!?!?!」

会場の照明が完全に落ちて、あたりが急に暗闇に包まれる。ザワザワと会場に不安が漂うが、幸いホテルには予備電源があるので停電はすぐに解消した。しかし、

「き、キャ——ッ!!」

明るくなった瞬間響き渡る女性の叫び声。赤い血が飛び散ったステージ。ざわめく会場。

ステージ後方で首から血を流して倒れていたのは、パーティーで司会を担当していた若い男性だった。

第三話

「亡くなったのは、この映画の原作者茶谷千先生の担当編集者である菅原丹治さんすがわらたんじ三十一歳だ」

通報に駆けつけた捜査一課の目暮警部は、現場に居合わせたお馴染みのメンツにまたかと苦笑いした。

犯人である可能性の低い一般人や報道関係者たちは別室で待機させている。お馴染みのメンツの一人である毛利蘭や鈴木園子らも、今はその部屋で事件の解決を待っているだろう。

被害者を恨んでいた人に心当たりは？ という警部の問いに、別室に集められた映画関係者たちは皆揃って首を傾げた。

ここに集まっているのは皆映画スタッフであり、出版社の人間は一人もいない。ほとんど関わりのなかった人物に殺される理由があるかなんて分からない、という

のは、この場にいるほとんどの人間が思ったことだろう。

「普通に考えれば、参加者の中で一番被害者と繋がり深い人間が怪しいんだが……」
これにはかの有名な眠りの小五郎も頭を抱えるしかないらしい。

パーティーに出席していた人間の中で、被害者が所属する出版社の人間は編集長しかない。しかし、彼は犯行前後にステージから一番離れた入口付近にいた事が確認されており、あの短い時間で犯行に及ぶのはどう考えても不可能である。

「ねえねえ、原作者の茶谷千先生は？ その人なら被害者と繋がり深いんじゃないかな」

「それが、茶谷先生の正体は、社長と担当編集である被害者しか知らないらしいんだ。今出版社の方に連絡して社長に確認を取ろうとしているけど、どうやらタイミングが悪くて連絡が取れないみたいでね」

当たり前のように毛利探偵についできた少年は、高木刑事の返答に口元に手を当てて考え込む。他の編集者どころか編集長まで知らないとは、大層な秘密主義である。

「では、このパーティーで何か変わったことはありませんでしたかな？」

「あ、あの……」

それならというように警部が出した質問に反応を返したのは、この映画でヒロイン役を務める女優の柴山瑠璃子だ。

「今日のスピーチの時、司会をしていた被害者の人の立ち位置がリハーサルと違った気が……」

「ああ、そういえば、彼はリハーサルではステージの一番端に立っていましたが、本番の時は……」

ステージ後方の中央付近……

同意するような笛川の言葉に目暮警部が続ける。

「それでは、本番の時に被害者が立っていた場所には、本来は別の人が立つ予定だったということですか？」

「はい、本番では彼が内側に立ったことで、僕達の立ち位置が一つずつズレたはずですから……」

関係者の視線が一気に監督の井上礼一に集まる。本番の時彼は司会者の隣に立っていたので、リハーサルでは被害者の場所には彼が立っていたことになる。

「お、おい！ 俺は何もやってねえぞ！ 大体、立ち位置の変更の話なんて誰も聞いてねえんだ！」

「たしかに僕らも聞いておらん。あの若造が自ら立ち位置を変えたとすると、相手の立ち位置を予期して殺害計画を立てるのは些か無理のある話じゃな」

演出家の老人が監督に同調し、彼の的を射た発言に刑事たちは再び首を捻った。見事なまでの膠着状態に、唸り声をあげることも出来ない。

「もしかして、被害者の人は誰かに間違われて殺されたんじゃない？ 例えば、本来あの場所に立つ予定だった、監督の井上さん……貴方に間違われたとかね」

「!!」

少年——コナンの言葉に、井上は顔を真っ青にしてその場に座り込んだ。

ザワザワと何かを囁き合う関係者たちに、警部がじろりと睨みをきかせる。

「それではあなたたち全員、犯人である可能性が高まったということですか？」

一方その頃、一般人用に用意された別室では、事件に巻き込まれたパーティー参

加者たちが不安な面持ちで情報が入るのを待っていた。

「あ！ いたいた蘭ちゃんたち」

「美織ちゃん」

キヨロキヨロと部屋中を見回していた美織は、端に並べられた椅子に座っている蘭と園子を見つけた。

「よかったあ見つかった！ 一人じゃ心細くって」

警察の人が来てくれたから大丈夫だっていうのは分かってるんだけど……と言つて、彼女は空いていた蘭の隣の椅子に座る。

「大丈夫よ。今回もおじさまが素早く解決してくれるって！」

「小五郎おじさまが？ そんなにすごい探偵だったのね」

「そっか、美織は海外にいたから知らないのね」

なんでも名探偵毛利小五郎といえば、ここ数ヶ月で数々の難事件を解決に導いてる有名な探偵らしい。いつも眠ったような体制で事件の真相を話すので、眠りの小五郎と呼ばれているようだ。

そんな探偵さんがいるなら大丈夫ねと笑った美織は、ふと蘭の周りを見回して首

を傾げた。

「ねえ蘭ちゃん、コナン君がいなみたいだけど」

「そうなのよ。コナン君ったらまたどこかに行っちゃったみたいで……」

探しに行こうかと思ったんだけど、警察の人に部屋から出るなって言われてるから……と眉を下げる蘭。心配そうに周りを見る彼女を、園子はなんでもないように笑って励ました。

「大丈夫よ！ どうせまたおじさまにくつついて行ってるだけでしょ」

おじさまも見ていてくれるだろうから大丈夫だと言うが、蘭はそうだといいいんだけどと不安そうだ。

「コナン君って、そんなにもどこかに行っちゃうの？」

子供があんまりウロウロしたら危ないんじゃないかしらと首を傾げる美織に、蘭はそうなのと大きく同意する。

「いつも突然いなくなっと思ったたらお父さんについて回ってたりして……きつと新一と同じで事件が好きなのよ！」

思い出したらイライラしてきたあの推理オタク！ と言って、蘭はここにいな

い人物に腹を立てる。大体遊園地で人を放ったらかしにして勝手に帰ったと思ったら、今度は事件を追いかけて帰ってこなくなるなんて！と過去の行いを掘り返して怒りに震える蘭。その話についての蘭の怒りは全く正当なもので、園子と美織はアハハと苦笑いをするしかなかった。

「犯人は貴方です、カメラマンの長谷部方治さん！」

中央のソファに腰掛けて、眠ったような体勢のまま犯人を告げる毛利小五郎。関係者が集められた部屋では、既に眠りの小五郎の推理ショーが始まっていた。

容疑者は、映画のスタッフで事件当時ステージの近くにいた四人。主演俳優である笛川理人、ヒロイン役を務める柴山瑠璃子、カメラマンの長谷部方治、演出家の馬場道山である。

笛川と柴山、馬場の三人はスピーチのためにステージで被害者の隣に並んでいたし、長谷部はカメラマンとしてパーティーの様子を撮影するためにステージ後方でカメラを構えていたことから、被害者を殺せるのはこの四人であるということに

なったのだ。

「そ、そんなのデタラメだ！ どうして俺が監督を殺さないといけないんですか!?」

犯人として名指しされ、長谷部は焦って無実を叫ぶ。しかし、真実を追い求める探偵にそんな演技は通用しない。

「貴方は監督である井上さんの酷いパワハラに苦しめられていた……殺害しようとする動機はそれで十分です」

それに、スピーチを行う皆さんは全員被害者の隣に並んでいました。監督と間違えて被害者を殺せるのは、殺害のためにステージ後方の幕の裏側で息を潜めていた貴方しかないんですよ……

芝居がかった台詞で追い詰める探偵に、長谷部はがっくりと膝をついて犯行を自白した。

動機は推理通り、監督からの酷いパワハラ。後の取り調べで長谷部は、カメラマンとしてそこそこキャリアも積んでいた自分のプライドが井上監督によって酷く傷つけられ、犯行に至ったと供述している。

間違えて殺してしまった被害者の方には本当に申し訳ないことをした。これから一生掛けて償っていきますと謝罪したそうだ。

第四話

いつも通り眠りの小五郎として事件を解決した俺は、警部たちに連れて行かれる犯人を見送ると、別室に集められていた一般客のもとに戻った。断りもなくいなくなったことを蘭に叱られたが、美織の仲裁で事なきを得る。

「すぐに解決してよかったね、美織ちゃん」

不安がってたもんねと笑う蘭に美織は照れくさそうに笑って、事件を解決した（という事になっている）おっちゃんにお礼を言う。案の定眠らされていて何も覚えていないおっちゃんは、彼女がすごいと褒めると微妙な顔をしてまあな、と取り繕った。

「それにしても、結局茶谷先生の正体は発表されなかったね」

残念だねと呟く蘭に、俺はその通りだと内心で同意した。

やっと出版社の社長と連絡が取れた頃には既に先生が事件に関係ないことは明ら

かになっており、結局小説家茶谷千の正体を公表する話はなしになったそうだ。密かに茶谷先生のファンで正体が気になっていた俺は、この結果に残念だと言わざるを得なかった。

「そういえば、コナン君は私に何を言おうとしたの？」

え？ と聞き返す俺に、スピーチが始まる前に何か言いかけてたでしょうと言う美織。俺はあっと思いついて、その時の疑問を彼女にぶつけた。

「美織姉ちゃんお仕事で来たって言ってたから、なんのお仕事かって気になっちゃって」

「ああ、その事ね」

そういえば仕事とか言ってたかしらと首を傾げる園子。そんなことよく覚えてたわねと呆れたように言われ、俺はアハハと誤魔化すように笑った。

「実は、今日は私の研究に出資してくださってるスポンサーの方の誘いで出席しててね。挨拶回りに付き合う約束だったのよ」

ほとんど仕事みたいなものでしょ？ と笑う美織に、そういえばこいつ天才少女だったなと思ひ出す。

どんな研究なのかと尋ねる蘭に何やら難しい化学用語で答える彼女を、俺は引きつった笑みで見つめるしかなかった。

しばらく関わらない方がいいと思ってたけど、もう会っちゃったな……まあ、俺が推理する様子までは見られてないからギリギリセーフか？

おじさまの車で帰るといふ蘭ちゃんと、スポンサーの方が車を出してくれるからと言って別れた。私はそのままホテルの裏手に回り、あらかじめ呼んでおいたタクシーに乗り込み行先を告げる。

静かに走り出した車内で、私は着物の合わせからスマホを取り出して一本電話をかける。

「こんばんわ。この間の件、彼とても喜んでました」

ありがとうございますと可愛らしい声でお礼を言うと、電話の相手は分かりやす

く氣を良くしたようで、いつでも頼っていいからねと粘着質な声で告げた。

今度食事でもどうかという電話相手の誘いをやんわりと断っているうちに、タクシーは既に自宅近くの大通りまで来ていた。電話を適当に切り上げてタクシーを降りる。

あたりはすっかり日が落ちて暗くなり、歩いている人もまばらである。ここから自宅までは十分もかからない。

私は自宅までの道をカラカラと草履を鳴らして歩いた。疲れた体に堪える歩きにくい履物に、着物はホテルで脱いでこればよかったなんて思いながら、再びスマホを取り出して別の番号に電話をかける。数コールしかないうちに電話に出た相手に、相変わずだと小さく笑みをこぼした。

「ごきげんようモラン大佐」

『これはこれはモリアーティ先生。この前の仕掛けは上手く行きました？』

「ええ、貴方のおかげですよ」

ありがとうございますと可愛らしい声で告げれば、電話の相手——モラン大佐と呼びれた男はクスクス笑い、また何時でもお付き合いしますと私の猫かぶりに付き

合ってくれる。全く、ノリが良くて素晴らしい。

『それにしても、いつの間に日本に帰ってらしたんです？　ご連絡頂けばお迎えに参りましたのに』

「冗談でしょう。貴方の迎えなんて来たら目立ちすぎて居心地が悪いです」

これは手厳しい、とおどけたような返答が帰ってくる。茶化されているのは分かるが、それを嫌味に感じさせないのがこの男を気に入っている理由のひとつだ。

『あの男、殺してしまつてよかったんです？　茶谷先生』

「ああ、あの男ね……」

すうっと視線が鋭くなるのが自分でも分かる。今日の被害者の生前の態度を思い出して、男との茶化し合いで上昇していた気分が急落した。

「いいのよ。彼、前から態度が大きくて気に入らなかつたんです。今回の事だって、正体を公表するにはまだ時期尚早だと言つたのに。社長に言つたら、前の担当さんに戻してくださるって」

電話をしていたらいつの間にか自宅に着いていた。私は草履をカランと鳴らして小綺麗な日本庭園に足を踏み入れる。

「それに、殺しただなんて人聞きの悪い事言わないで下さい。私はただ、ちょっと彼の気持ちを後押しして、ちょっと人違いが起きるように誘導しただけ」

飛び石の道半ばで立ち止まり、うっそりと微笑む。悪い人だと囁く電話相手にいつそう笑みを深くして、さっさと電話を切るために要件を話す。

「江戸川コナンという少年がいます。友人の家に居候してるみたいで、今日も会場で一緒になったの」

また会う機会もあるかもしれないと独り言のように呟くと、男はそうですねと頷き、それではまたと電話を切った。

引き戸の鍵を開けて家に入る。草履を脱ぎ捨て冷たい廊下を歩き自室に入ると、着物を脱いで丁寧に畳んだ。

本当はしばらく吊るしておいて風を通した方がいいのだが、疲れているのでそんな気力はない。どうせ明日には呉服屋に送ってクリーニングするのだから問題は無いだろう。

布団に倒れ込む前にシャワーを浴びないと。

私はよろよろと風呂場まで行き、シャワーの蛇口を捻る。温かいお湯が髪と肌を濡らして、浴室には水しぶきの音がにぶく響いた。

江戸川コナン、小学一年生。彼は一体何者なんだろうか。イレギュラーなだけじゃない。彼について何か重要なことを見落としている気がする。

それに何より、今日の事件直後にちらりと見えた彼の姿。彼は被害者に一番に駆け寄り、脈を確認してから現場をウロウロ歩き回っていた。

あの少年の行動は、本来探偵役のものだったのだ。本来あの場にいたであろう私のホームズ君が取る予定の行動だったのだ。

イレギュラーであるあの少年の存在を許したのは、想定外を含んだシナリオがどう変化するのか私自身興味があったからだ。

イレギュラーに何らかの「役」が付与されればシナリオは曲がる。はたまた彼がただのエキストラに過ぎないならば、シナリオは予定通りに進んでいく。どちらにしても、自分の芸術に大きな影響は与えないと、その湾曲さえ利用して舞台をもっと素晴らしいものにできると確信していた。していた、けど、

「イレギュラーはあくまでイレギュラー、か……」

まさか彼に「探偵役」が付与されるなんて。

本来不在であるはずの「探偵役」を彼が務めたことで、かえってシナリオは寸分違わず真っ直ぐに進んでいった。事件は解決され、犯人は捕まり、そして「黒幕」の存在は知られない。何から何まで計画通り。つまり、少年は完璧に「探偵役」を務めたということだ。

「彼、何者なの……？」

シャワー蛇口をキュッと締める。

ながい黒髪から滴る水分を軽くしぼり、浴室の扉を開けた。

「何にしろ、計画の変更が必要ね」

舞台はまだ始まったばかり。

江戸川コナンに関する調査報告

年齢：6歳

性別：男

所属：帝丹小学校1年B組

出身地：不明

出身病院：不明

出身幼稚園：不明

保護者：阿笠博士

戸籍情報無し。

学校の成績はとても良い。サッカーが得意。

友人の吉田歩美、小嶋元太、円谷光彦、灰原哀と共に少年探偵団として度々事件を解決している。

現在毛利探偵事務所に居候中。

過去に怪盗キッドから宝石を守ったことがあり、キッドキラーと呼ばれている。

他にも、事件現場に度々居合わせ、捜査一課の捜査や毛利小五郎の推理の手伝い等をしている。

日本警察の他にFBIにも知り合いがいる模様。

追伸

友人の一人、灰原哀も戸籍情報なし。追加で調査しておきます。

幕間

これは少女の過去のお話。

少女——阿部美織が初めて人を殺したのは、十一歳の時である。

その頃には少女はもうとくに自分の才能に気が付いていたし、自分の容姿が他人より優れていることにも気が付いていた。そして、自分の一言で人間がいなくなる可能性があるということも。

実際に少女がしたことは、善良な大学職員の一にぼろりと零しただけである。『両親が私を利用しようとしてる』

それが事実であるかどうかはさして問題ではない。少女がそれによって苦しめられている、という解釈が存在するだけで十分なのだ。

その話は職員から教授に伝わり、教授はそれを聞いて何らかの策を使い、そして

少女の両親は死んだ。

何もかもが、少女の計画通りだった。

少女の両親は普通の人間だった。

母親は白人と日本人のハーフで、父親は日本の古くから続く名家の生まれではあったが、それでも普通の人間だった。二人とも一流企業に勤め、すこぶる優秀な人間ではあったが、それでも一人娘の特異性には遠く及ばなかった。

少女は銀のスプーンどころか、神様からのギフトまで持って生まれてきた。ギフトを持たない両親は一人娘の才能を持て余すことしかできなかったが、少女はそん

な事は関係ないというように自ら沢山の知識を吸収した。

ある日母親が言った。

『天才のことは天才に任せればいいのよ』

その一言で、少女のイギリス行きが決まった。両親も海外赴任という形でついて行く事になったのは世間的には褒められるべきことだが、少女にとっては大して良いことではない。

こうして、少女とその両親は、少女の才能を伸ばすためという名目で——その実ほとんど厄介払いというような状態で——そこそこ仲良くしていた友人と別れ、母親の母国であるイギリスに向かったのである。

さて、イギリスに行って難関であるオックスフォード大学に入学したところで、少女の特異性が紛れるわけではなく、相変わらず少女は特別だった。

そもそも、イギリスの大学に日本人の七歳の少女がいる、という状況が既に普通ではない。

ましてやその少女が、神からのギフトも銀のスプーンも両方持っているような特

別な少女であるのなら、ほとんどが一般的で、努力して入学してきた秀才の集まりである大学の中で、存在が浮かないはずがないのだ。

それでも少女は「世界有数の超難関大学」という場所を得て、まるで新品のポングジのようにどんどん知識を吸収していった。

ギフトを持つ可愛らしい少女は、同じくギフトを授かった一握りの人間にとっても気に入られた。彼らは少女に次々と有益な情報を与え、そしてその誰もが少女の持つギフトの素晴らしさに感服した。

また、彼女は大層可愛らしい見目麗しい少女だったので、ギフトを持たない普通の教授の中にも（また違う意味で）彼女を氣にいる人間がいた。彼は少女をととても可愛がった。しかし少女はただ無駄に可愛がられるだけのような素直な頭脳をしていないので、次第に教授は彼女の言いなりになっていった。

そして、少女はいつしか退屈した。

彼女を重宝する教授たちから全ての知識を引きずり出して、吸収して、それでも尚少女の知識欲は満たされなかった。答えのある世界に失望し、退屈し、そして自ら未だ答えのない世界へと足を踏み込んだ。しかしその世界でも、少女が答えを見

つけてしまうのは時間の問題だった。

その頃から、両親の存在は彼女にとって両手足を縛る鎖になりかけていた。

両親は少女の才能を妬み、疎ましく思うと同時に、利用価値を見出すようになっていた。少女の研究で金儲けを考え、よりお金になる方へと彼女の研究を誘導しようとした。これが、彼女にとって最も疎ましい事だった。

少女は考えた。

こんな疎ましいことがなくなる方法を。

どうしたら両親が自然に、確実に、そして自分の与り知らぬところでいなくなってくれるのか。

どうしたら少しも疑いの目を向けられることなく両親を殺せるのか。

そして、事は起こった。

少女の両親が交通事故で死んだのは、彼女が十一歳になって大学を卒業し、大学院に進学した矢先のことだった。

少女は大学の研究室でその知らせを受け取り、突然両親を失った可哀想な女の子になった。

全てのことが、そっくりそのまま少女の計画通りだった。

第二章 お金で買えるもの

第一話

さらさらと風が揺れる。

それに呼応するように周囲の木がざわめいて、そしてまた静かになる。所々にぽつりと立っている石灯籠には火が入れられておらず、飛び石が並べられた道の先は木々に隠されて見えない。

池の水のように停滞した時の流れの中で、一人の少女がふら、と足を揺らした。しゅっと紙と紙の擦れる音が響き、しばらくの後、パタンと本が閉じられる。

「ふう……」

少女——阿部美織は、穏やかな朝の光を浴びながら自宅の縁側に座って読書に興じていた。

眼前に広がるのはそこそ立派な日本庭園風の庭。「風」というのはこれが歴史も浅いただの日本庭園の真似事であることを知っているからだ、何も知らない一般人から見ればこれは正しく日本庭園だろう。

置いてあるサンダルをつっかけて庭に出る。ワンピースの裾が汚れないように気を使いながら飛び石の道を進んだ。ぽちゃりと音がして、池の水面から綺麗な錦鯉がその模様を見せびらかす。

やっぱり、帰ってきてから真っ先に庭の整備をさせてよかった。

先日やっと家電を買い揃えたという家の中の有様を思い出して、あまりの生活への無頓着さに自分で呆れる。

掃除洗濯に料理まで全て自分でこなしているが、家が広いので掃除は使わない部屋までは行き届かないし、洗濯機は昨日買ったのでそれまでは近くのコインランドリーで済ませていた。さすがに冷蔵庫などのキッチン家電は帰国後一週間以内には買い揃えたが、調理器具は多い方ではないし作る料理も目分量のオンパレードだ。

出来ない訳では無いが面倒くさいというのが自分の家事への認識で、特に不便や不満を感じていないのだからそれでいい。自分の興味が向いたのが、家事では

なかったというだけの事だ。

その分、興味が向いたこと——例えばこの庭とか——へのこだわりは強い。

所々にガタが来ている日本家屋への不満は絶えない（そのうちリフォームしてやろうと思っている）が、この芸術的で美しい庭だけは別だ。幼い頃からこの庭は私のお気に入り、それは海外にいる間も薄れることのない記憶だった。

計算され尽くした配置であるのにそうと感じさせない自然美。父の家系に代々伝わる屋敷の庭であるここは、私の芸術観の基盤になっているのかもしれない。

そんなことをつらつら考えながら、出かける準備をするために家の中に入った。

「元太！ パス！」

ゴールに向かって走りながら叫ぶ。元太はいくぞ！ と言いながらこちらにパスを出そうとするが、その前に立ちはだかるのは光彦だ。

「そうはさせませんよ！」

元太がコナンの方に蹴ったボールは光彦によって違う方向へ蹴り上げられ、勢い余ったボールはそのまま公園の外に向かって飛んだ。ボールが飛んだ先、そこには着物姿の若い女の人が――

「お姉さん危ない！」

歩美の声に反応した彼女は真っ直ぐ自分の方に飛んでくるボールを見ると、両手を伸ばして顔の前でピタリとキャッチした。

「ナイスキャッチ……かな？」

「美織姉ちゃん!？」

ひょこつとボールの陰から顔を出した彼女を見て、ボールを追って駆け寄ったコナンは驚いて足を止めた。

「あらコナン君、また会ったわね」

今日はお友達と一緒になの？　と言いながらしゃがんでボールを渡してくれる美織に、コナンはウンと頷いてお礼を言った。

美織は綺麗な模様の紅色の着物の下に白いロングのワンピースを着ており、襟と裾がヒラヒラと着物の下から覗いている。淡いクリーム色のショールを肩に掛け、

黒のベレー帽の下からは黒くて長い三つ編みが伸びる。ウエストを締めるのは帯ではなく黒いコルセットで、足元にも黒のブーツを合わせていわゆる和洋折衷コーデに身を包んでいた。

「わあ！ お姉さんのお着物可愛い！」

キラキラとした目で着物を褒める歩美に、彼女は嬉しそうに微笑んでお礼を言っ
て歩美の頭を撫でた。そういえばコナンとして初めて会った時も何故か頬をつついできたし、意外と子供好きなのかもしれない。

「可愛らしいガールフレンドじゃないコナン君。名前はなんて言うの？」

そんなじゃねえよ！ と慌てるコナンをよそに、集まってきた少年探偵団のメンバーが次々と挨拶する。サッカーに加わらずに少し離れたところで本を読んでいた哀は、ボールを取りに行った子供たちがなかなか戻ってこないの、不思議に思っ
て様子を見て来ていた。

「で、あの子が哀ちゃんよ！」

歩美が後ろを振り返って哀のことまで紹介してしまう。美織が後ろから歩いてくる少女に目を向けると、彼女は少し驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「あなた……もしかして、阿部美織さん？」

美織は驚いて目をぱちくりさせると、よく知ってるのね、と感心したように呟いて微笑んだ。

「そうよ、私は阿部美織。哀ちゃんっていったかしら？」

立ち止まってしまった哀の前まで歩み寄り、しゃがんで目線を合わせる美織。彼女がよろしくと言って右手を差し出すと、哀は心なしか鋭い視線を向け、手を握り返す。

「灰原よ」

よろしく、と言ってすぐに手を離してしまった少女に、美織は困ったように眉を下げた。灰原ちゃんね、と微笑んで再び立ち上がる彼女に、コナンはねえねえと声を掛ける。

「美織姉ちゃん、そんな格好して何処に行くの？ 何かのイベント？」

美織が着物を着ていることを指してそう尋ねるコナンに、彼女はニッコリと笑って駅前に新しくできたカフェに行くだけよ、と答える。

「最近はいイベントじゃなくても普段着に着物を着る人が増えてるのよ。これは昔叔

母が着ていたものがまだ残ってたから、せっかくだからアレンジして着てみたの」
じゃあ私も行くわ、と手を振って公園を出て行く美織。ボール拾ってくれてありがとうございましたと光彦が叫ぶと、彼女は振り返ってもう一度手を振った。
細い路地に消える彼女を見送って再びサッカーをしようと公園に戻りかけるが、元太がおいと声を上げたので皆立ち止まる。

「これ、何か落ちてるぞ」

元太が拾ったものを全員で取り囲むように見る。

「キーホルダー……？」

「さっきの彼女の落とし物じゃない？」

落ちていたのは小ぶりのウサギのぬいぐるみが付いたキーホルダー。可愛い赤い和柄のウサギで、たしかに先程の美織のファッションにぴたりと合っている。
「歩美、届けに行ってくる！」

「僕も行きますよ！」

「俺も行くぞ！」

何故か積極的な三人にコナンが呆気にと取られていると、子供たちは全員で走って

いこうとする。全員で行く必要ないだろ！ と叫ぶが、彼らは何故か自分が行くと言って譲らない。よほど美織のことが気に入ったのか何なのか、とにかく早く行かないと追いつけないかもしれないので、焦れたコナンは元太の手からキーホルダーをひったくった。

「もういい、俺が行ってくるから！」

コナンは急いで美織が消えた路地に走っていく。ずるいですよ！ と叫んだ光彦に軽く振り返り、大きく手を振って細い路地を曲がっていった。

美織が入っていった路地に入ると、急に陽の光が入らなくなり、あたりは薄暗くなかった。

細い路地の、おそらく出口であろうところから光が差している。そこには、逆光で見えにくいが美織の後ろ姿が――

「美織姉ちゃん！ これ……」

コナンの大声に逆光で黒いシルエットになった人物が振り向いた。

影は三人分。真ん中に美織、両側の二人は彼女を囲んで腕を掴んでいるように見える。

一瞬、時が止まったかのような静寂の後、美織の影が激しくもがき、両側の二人が取り押さえようと彼女の体に腕を回した。思わず、というようにコナンの足が動く。

「美織姉ちゃ、」

「来ちゃダメ！ 逃げて！」

「!!」

美織の声にハッと我に返り、コナンはベルトをいじってボールを出そうとする。明らかに犯罪行為を目の当たりにして、逃げる、という選択肢は彼の中には存在しなかった。ましてやそれが知り合いのピンチだと言うのだから尚更である。

しかし、コナンがベルトからボールを出すより前に、背後から近づいたもう一人の男に捕まってしまう。為す術もなく気絶させられたコナンは、同じく捕まった美織と共に停まっていた黒い車に乗せられた。

二人に目隠しをして手足を拘束したのを確認すると、いたいけな少女と少年を誘

拐した三人の男は、車に乗り込み大通りの車列の中に溶け込んでいく。

薄暗い路地裏には、美織が被っていた黒いベレー帽だけが残っていた。

第二話

「……………くん、…………君、コナン君！」

目を覚ますと、あたりはべた塗りの暗闇に包まれていた。いや、黒い布で目隠しをされているのでそう感じるだけである。両手は後ろ手に縛られており、頬に触れる床はひんやりと冷たいので、おそらくフローリングにそのまま転がされているのだろう。目覚めたばかりのぼーっとした頭で、先程からずっと聞こえる自分を起こした小さな声が知り合いの少女のものであることを認識した。

「…………み、おり？」

「っ、よかった、目が覚めたのねコナン君」

具合はどうかという問いかけは自分の頭の後ろから聞こえてくる。おそらく背中合わせになるような形で寝かされているのだろう。大丈夫だと答えてハアとため息をつく。硬い床の感触が少し痛かった。

「さっきまで男が三人この部屋にいたけど、今は出ていったみたいなの」

だから君を起こそうと思つて声をかけたのよ、と言つて同じようにハアとため息をつく美織。取り敢えずは室温も丁度いい好待遇だが、それがいつまで続くか分からない。最悪の場合殺されるかもしれないのだ。不安なのは当然だろう。

「ここはどこなのかな」

「それは分からないけど、犯人の目星はついてるわ」

本当!? と食いついた俺に、ええと返して彼女は話しだした。

「私を誘拐するってことは、普通の身代金要求じゃなくて私の研究が目的の可能性が高いわね」

私の顔はまだ日本ではそんなに知れ渡ってないし、顔を見て分かるのは知り合いかその道に詳しい人くらいよ。犯人は私を眠らせるために薬品まで用意してた。ということは計画的な犯行だろうし、身代金を要求するだけなら誘拐現場を見られたくらいで君まで連れてくる理由がないもの。おそらく犯人はそれなりに社会的地位の高い人間で、絶対に犯行を知られたくないんだわ。

「ということは、犯人は美織姉ちゃんの研究を止めさせたいか、自分のものにした
い……?」

「そういうこと。おそらく私のスポンサーのライバル会社の人が犯人ね。スポンサーに巨額の金を要求して、そして私を殺して研究を頓挫させるか脅して自分の会社に引き抜く。どちらにせよスポンサーの会社は大損害を被るってわけ」

美織の言葉を聞いて、俺は額に冷や汗が浮かぶのを感じた。彼女は自分が殺される可能性にまで言及した。あまりパニックになっていないのはいいことかもしれないが、誘拐されたというのに些か冷静すぎる気もする。無理をしてないといいのだけど。

俺の聴覚が僅かな足音を捉える。誰か来たと囁いて、何事も無かったかのように未だ目覚めてないふりをした。崩していた脚を元通りにして、ぐったりと力を抜く。背後で美織が身じろいだ気配がした。

ガチャリと扉の開く音がして、硬質な足音が近づいてくる。おそらく三……いや四人分。そのうち二人が真っ直ぐこちらに向かってきて、すぐ近くで立ち止まるのが分かった。

「おい、起きてるか？ お二人さん」

ぐい、と布が引つ張られて目隠しが外される。目の前には少しガラの悪そうな体

格の良い男。彼のバックには沢山のデスクが整然と並んでいて、ここがオフィスのような場所であることを知った。体をひねって顔を後ろに向けると、美織はすぐ後ろにある低いソファに寝かせられていた。

同じように目隠しを外された美織は、彼女の目の前に立った男をキッと見上げて沈黙を貫いている。鋭い眼差しで睨まれたインテリ風の初老の男性は、口の端をニヤリと歪ませて笑った。

「お嬢さん？　突然ですまないが、今日から君は私の会社で働いてもらおう」

拒否権は無しだ。命が惜しいならね。

芝居がかった仕草でくると後ろを向きながらそう言った彼は、おそらくもういい歳なのだろうがそれを感じさせない美しい姿勢で立っている。

「……あなた、誰なの」

優雅だった動きがピタリと止まった。まさか自分のことを知られていないとは思わなかったのだろう。それまでと一転してぎこちない動きで振り返った彼は、額に青筋を立てて作りものの笑みを浮かべる。

「君のスポンサーのライバル会社、三葉製菓の社長をしている須郷丈一郎^{すこうじょういちろう}。今日か

ら君の新しい飼い主になる男だ」

「コナン君、戻ってきませんねえ」

早くしないと先にサッカー始めちゃいますよ！　と言って、光彦は地面に置いていたサッカーボールを持ち上げた。

何かあったのかなと心配そうに眉をひそめた歩美に、本を読んでいた哀は顔を上げてため息をつく。まったくあの人は、とでも言いたげな表情に、元太は焦れて座っていたベンチから立ち上がった。

「ちょっと見に行ってみようぜ！」

コナンのやつ、どうせあのねーちゃんと長話でもしてんだろ！　そう言った元太に、歩美と光彦は賛同してずるいずるいと喚き立てる。仕方ないわね、というように哀が本を閉じて立ち上がったので、子供たちは連れ立って公園を出た。

美織やコナンが曲がった路地をみんなで同じように曲がると、薄暗くてどことな

く不気味な雰囲気を醸し出す道に全員が眉をひそめた。両側が高い建物に囲まれていてちょうど影になっているのだ。道の向こう側には明るい大通りが見える。

「誰もいないな……」

大通りまで出ちゃったんでしようかという光彦の言葉に、全員でまとまって細い路地を歩く。路地の出口付近まで来たところで、コンクリートの地面に黒いものが落ちているのが見えた。

「これ、お姉さんが被ってた帽子じゃない？」

ホラ！ と笑って拾ったベレー帽子を被ってみせる歩美。確かに美織は黒いベレー帽を被っていた、と全員が彼女の服装を思い出した。落としたのだろうか。歩いている時に、自然に？ それとも何か、被っていた帽子が落ちるような何かがある——例えば誰かと揉み合ったとか——あったのだろうか。

「大通りにも江戸川君たちはいないみたいよ」

路地を出て通りの様子を見ていた哀が戻ってくる。

美織はまだしも、コナンまでどこにも見当たらないのはおかしい。幾度となく事件に巻き込まれてきた少年たちはそう考えた。やはり何かあったのだ。事件に巻き

込まれた？ 強盗にあったとか？ それとも――

「誘拐、かしら」

哀の言葉に、正義感溢れる小さな探偵たちはハッと顔を見合わせた。

なんとか両手を拘束していた縄を外して、コナンは無人のオフィスの中を調べる。主犯と思われる須郷を含めて四人いた男たちは、美織のスポンサーである相馬正蔵氏に身代金要求の電話をかけた後、どこかに行ってしまった。見張りにはドアの外にいる。コナンは犯人たちが当分戻ってこないだろうと考え、場所を特定できるものがないかあちこち調べ回っていた。

美織はどうやら車に連れ込まれた時に足首を捻ったらしく、調査には参加しないで大人しくソファに座ってもらっている。縄の跡がくつきりと残った手首をさすつて、美織は俯いて呟いた。

「ごめんねコナン君。私のせいよね」

え？ とコナンが振り返ると、彼女は眉を下げ、悲しそうに薄く笑っている。聞

夜を溶かしこんだような真っ黒の瞳がゆらりと光った。

「私がつと気をつけていれば、誘拐なんてされなかったわ。コナン君が巻き添えになることもなかった」

「美織姉ちゃん……」

「いつもはボディガードを連れて歩くし、あんな細い路地なんて入らないの。でも、あの時はちょっとしたお出かけのつもりだったし、いつもいつも黒スーツのSPと一緒になんて気が滅入るのよ。近道してすぐに帰ってくれば大丈夫だと思った。私の顔はまだ日本ではそこまで有名じゃないって話だったし」

「でも、迂闊だったわ。ごめんなさい」

弱気になっている彼女のことを、コナンは少し意外に思った。彼女ほどの人でも、自分の置かれた境遇を窮屈だと感じることもあるのだと。そこら辺の大人より桁違いに優れた頭脳を持っていたても、やはりまだ俺より年下の子供なのだ。いや、七歳の頃から大人に囲まれて育った分、普通の高校生より精神的には子供っぽいところがあるのかもしれない。

気が滅入るなんて、そんなの当たり前だ。幼い頃からずっと窮屈な暮らしに当た

り前のように耐えてきたのだ。イギリスにいた頃なんかは今より窮屈だっただろう。約十年ぶりに帰ってきた母国で、少し浮かれて羽目を外してしまっても誰も責められない。

「美織姉ちゃんのせいじゃない。悪いのは犯人だよ」

少女はゆるりと顔を上げて、コナンの顔を見る。本当か、と問うようにじっと目を見つめる彼女に、コナンは青い目をキラリと煌めかせて力強く頷いた。

自信に満ち溢れた顔だった。

ここは一体どこなのか。その手がかりが、ようやく掴めたのだ。

第三話

ビルの外ではたくさんの赤い警光灯がぐるぐると回っている。駆けつけた警察官に救い出された美織とコナンは、美人な女性警察官の誘導に従ってエレベーターに乗り込んだ。

結局、二人が監禁されていたのは米花市内にある貸しオフィスの一室だった。部屋に残された手がかりから見事に場所を導き出したコナンは、二人を探し回っていた少年探偵団たちに探偵バッジで連絡を取って警察に通報させたのだ。幸い、脅迫電話を受けた美織のスポンサーは警察に連絡していたらしい。話はすぐに担当の刑事に通じ、間もなく二人は救出された、という具合である。

順調に下り続けるエレベーターの中、美織はどうやら知り合いであるらしい女性警察官と話しているコナンの横顔を眺める。きらきらと光る青っぽい瞳には、子供っぽい笑みを浮かべていてもどこか理知的な色を感じるような気がした。

「ありがとね、コナン君」

エレベーターを降り、貸しオフィスの入ったビルの出口へ向かう。コナンと女性警察官の会話が途切れたタイミングで呟いた美織に、コナンは隣で歩いている彼女の目をじっと見つめた。

「私のせいじゃないって言ってくれたの、嬉しかった」

そう言った美織の横顔は、相変わらず眉の下がった苦笑いのような微笑みだった。彼女は自分の言葉を嬉しかったと言ってくれたが、その言葉が本当に届いているのかは分からない。そういった些か悲観的な感想を少年は抱いた。それでも、その瞳にたたえた悲しみの色が少しでも薄くなったらいいと少年は思った。

「それに、凄かったわ。コナン君の推理。やっぱり工藤君にそっくりね」

こちらを向いてニコツと綺麗な顔で笑った美織に、コナンはハ？ と虚をつかれたように間抜けな顔をして、そして突然アワアワと慌てて手をバタバタ動かした。いい、いや、そんな、とまともに言葉にならない音を吐き出してウロウロと瞳を泳がせる。そんなコナンを面白そうに見ながらフフと控えめに笑い声を漏らすと、美織は足を速めて先を歩く警察官を追いかけた。

コナンはハッと我に返ると、いつの間にか開いていた距離を慌てて詰める。先を行く美織を小さな歩幅で追いかけながら、少年は彼女の後ろ姿を眺めた。

……まさか、バレてねえよな。

ビルが出るともうとくに太陽は沈んでいて、ぐるぐると撒き散らされた赤い警光灯が浮かび上がるようだった。思ったより時間が経っているな、とコナンは思った。左手の腕時計を見ると、針は七時十二分を指している。昼に給食を食べてから何も口にしていない小学生のお腹がグウと大きな声で鳴いた。

「おお、コナン君！ 美織君！」

パトカーから少し離れたところに車が停まっており、その横に立っていた阿笠博士が二人に呼びかけて大きく手を振った。よく見ると、隣に小さな女の子の姿もある。哀だ。コナンは二人に駆け寄ると、迎えに来てくれたのかと言って博士と哀を交互に見た。

哀はコナンの問いには返答せず、彼の後ろから追いついてきた美織をじっと見つ

める。美織はそんな彼女を少し困ったように見ると、今日はもう遅いから事情聴取は後日になった旨をコナンに告げた。

「私はパトカーで家まで送ってもらうけど、コナン君はどうする？」

博士に送ってもらうのかしら、と尋ねる美織に、コナンはうんと答えて気をつけて帰ってねと手を振る。女警察官に声を掛けてパトカーに乗り込もうとする美織の後ろ姿を眺めていたコナンは、ああっと大声を出して彼女を引き止めた。

「これ！ 返すの忘れるところだった」

急いで駆け寄ってハイと差し出した手の中には可愛いうさぎのキーホルダー。美織はキーホルダーを驚いたような表情で見つめると、あらと呟いてそれを受け取った。

「私、これ落としてたのね」

拾ってくれてありがとうと笑った美織。コナンはそれじゃあと手を振って博士の元に戻り、去っていくパトカーを見送った。

きっと彼女は、今日が終わったらまた窮屈な生活に戻るのだ。二度とボディガードを連れないで出かけることはないし、二度と細い路地になんて入ることはな

いし、二度と浮かれて羽目を外すこともないのだろう。幼い頃から大人であることを強要された彼女は、もう決して子供のように浮かれたり、ちいさな冒険に心を躍らせることをしないのだろう。

コナンは博士の車に乗り込んでシートベルトを締める。先に隣の席に座っていた哀は、パトカーが消えていった方向をぼうつと見つめたままだった。

「あのキーホルダー、やっぱり彼女の落とし物だったのね」

走り出した車内で哀はぼつりと呟く。視線を窓の外に向けた彼女の横顔は流れていく景色を見つめているようで、しかしここではないどこか遠くを眺めているようにも見えた。

「そういえば灰原、お前よく美織のこと知ってたな」

「当たり前よ。科学者で彼女の名前を知らない人なんていないわ」

コナンは哀が美織と初めて会った時のことを思い出していた。少女が阿部美織であることを知っていた哀に少なからず驚いたが、そう言われてみれば当然かもしれない。美織も哀も、同じ科学という分野で戦ってきた人間なのだ。

「特に私にとって、彼女はコンプレックスの塊みたいなものだから」

阿部美織が世界に認められた天才少女だとすると、哀——宮野志保は、そうなれなかった少女だった。

志保も美織と同じように飛び抜けた頭脳を持ち、同じように天才少女と呼ばれるべき人間である。でも、世界が選んだのは美織の方だった。美織がイギリスの優秀な教授たちに囲まれて自由に研究活動をしていた頃、志保に与えられたのは不幸と束縛だけだった。両親が死に、唯一残った肉親である姉とも引き離され、ただただ組織に言われるままに望まぬ薬の研究をせられた。どこまで続くのか分からない暗闇の中でもがいていた彼女が、世界で華々しく活躍している同年代の美織に嫉妬心を抱くのは自然なことだった。

私はこんなに苦しんでいるのに。彼女だって私と何も変わらないはずなのに。どうして彼女なの。どうして私なの。どうしてこんなに何もかも違うの。私は何か悪いことでもしたの——

「あいつ、自分のせいだって言ったんだ」

誘拐されたのも、俺が巻き込まれたのも、全部自分のせいだって。コナンは誰も座っていない助手席のヘッドレストを見ながらそう言った。そこに、パトカーの後

部座席に乗り込んだ彼女の後ろ姿を思い浮かべているようだった。

「自分がちょっと油断したからって。迂闊だったって、そう言ったんだ」

あいつのせいなんかじゃないのに。決してあいつは悪くないのに。あいつは子供で、俺より一つ年下の女の子で、まだ守られるべき存在のはずなのに。自分の責任だって、まるで大人になることを強制されてるみたいだ。コナンは——新一は、彼女が子供らしくいられないのがすごく悲しいことのように思えたのだ。

「あいつはあいつで、彼女にしかない苦しみがある」

静かに呟いた彼に、哀は無言で返してそっと瞳を閉じた。

パトカーを降りて家の門をくぐる。ロウソクの代わりにセンサー付きのLEDライトを入れておいた石灯籠がぼつと光った。本物の火のような揺らめきが表現されており、池の表面に映りこんだ明かりがきらきらと揺れる。

美織は玄関から家に入ると、すぐに庭に面する襖を開けて縁側に腰を下ろした。合わせに入っていたスマホが着信を告げる。彼女は数コール、少し多めに着信音を

聞いてから電話に出た。

「正蔵^{しょうぞう}おじさま？」

彼女が電話に出ると、相手はああよかった怪我はないかい乱暴されてないかいと嵐のようにまくし立てる。正蔵というのは美織のスポンサーの名前で、彼女の名誉のために言うておくとおじさま^{ぢいさま}というのは正蔵氏が望んだ呼び方である。さすがの彼女もスポンサー会社の社長を進んで「おじさま^{ぢいさま}と呼ぶほど礼儀知らずではない。これは美織を孫のように可愛がっている彼の愛情の現れなのだ。

「怪我もないですし、私は大丈夫でしたよ。正蔵おじさまのおかげです」

身代金払ってくださったんでしょと美織が感謝の意を示すと、正蔵氏はそんな事いいんだと電話越しに首を振る。お金を払ったくらいで君の命が助かるんなら惜しむはずはないよと言う彼に、美織はなんとも無感動に愛されてるなァと思った。適当に話を終わらせて電話を切る。

無駄なことをしたな、と美織は非情な感想を抱いた。正蔵氏が身代金を払ったにもかかわらず、須郷は美織を解放しようとはしなかった。当たり前だ。須郷の目的は金では無かったのだから。

きらきらと揺れる水面をぼうっと見つめていると、ばちゃっと派手な音がして鯉が一瞬水面に口を出した。美織は一度部屋の中に引っ込むと、すぐに戻って池に近づいて餌をあげ始める。

そもそもこの誘拐劇自体が無駄なことだったのだ。須郷は犯罪なんて起こさなくても私を手に入れることが出来たのに。

研究者とスポンサーの関係なんて、所詮はお金で買えるものだ。少なくとも私はそう思っている。須郷が今のスポンサー——正蔵おじさまより高い金額で私と契約を結ぶと言ったら、私はきっと頷いただろう。正蔵おじさまより操りやすそう、という計算があつてのことだけれど。私の研究が欲しいならお金を出せばいいだけで、犯罪を犯す必要はなかったのだ。

正蔵おじさまとの関係だって最初はそうだった。まずはお金。次に容姿。中身はそのあと。人との関係なんて基本はそんなものだと思っている。そうやって私は自分の環境を作り上げてきたのだ。

私にとってこの誘拐劇に意味があつたとすれば、それはコナン君のことだけ。

池の水面に数匹の鯉がバチャバチャと群がる。濡れた鱗がてらてらと光を反射す

る。びゅうつと風が吹いて木々を揺らした。

誰かが私を誘拐しようとしているのは知っていた。だから、コナン君の能力を試すために利用しようと思ったのだ。

私は実際に彼が推理するところを見たわけじゃないし、彼が何者なのか見極めるためにも必要なことだった。彼が本当に探偵役にふさわしいのか。本当に工藤君の代わりが務まるのか。ちゃんとこの目で見るべきだと思った。結果は言わずもがな、である。

ひとつ、気になることがあった。

眠らされていたコナン君を起こした時、彼は寝ぼけ半分で私のことを何と呼んだ？

『……み、おり？』

私を「美織」と呼び捨てて呼ぶ人は意外と少ない。コナン君は今まで「美織姉ちゃん」と呼んでいたはずだ。今まで通り呼ぼうとして途中で途切れてしまったという可能性もある。でも――

『美織姉ちゃんのせいじゃない。悪いのは犯人だよ』

振り返ったあの顔。強気で、優しく、自信に満ちたあの表情。その瞬間脳裏に
よぎったのは幼馴染の彼の姿だった。

分からない。でも、可能性はある。

確信はない。でも、予感はある。

近いうちにあそこへ行かないと。何か分かることがあるかもしれない。調べない
といけないこともある。

姿を見せない私のホームズに何があったのか、ちゃんと調べないと。

ホームズとモリアーティ

著者 蔗糖

発行日 2020 年 5 月 9 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/214041/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
